

英語教育を知る58の鍵

松村昌紀 著

A5判 256pp.
本体1,800円+税

白畑知彦



英語教育を実践する教師の必読書

非常にバランス良い書物である。英語教育学に関わる先行研究に関し、他の書物から無防備に孫引きするのではなく、幅広い領域から拾い集め、自分自身で丹念に読み、その内容を咀嚼し、初学者に分かりやすく解説している。書かれている内容は、ある一方向の主張に偏ることなく、客観的姿勢を貫き、きわめて健全である。また、議論の中身は、一見平易な日本語で書かれてはいるが、洞察力に富み、深遠である。著者が真の研究者であることがよく分かる。

本書は英語教育に関連する58項目のトピック（これが、英語教育の扉を開くための「鍵」となる）をピックアップし、それぞれの項目について3～4ページの読みきりの形で、論じている。本文では簡潔に内容を説明することに徹しており、もう少し詳しい説明や解説を知りたい読者のために、各章の末に付けられた「注」の中で関連文献を紹介する形を取っている。

本書は7章構成である。以下、紙幅の許す範囲で中身を紹介したい。まず、「第1章 日本の社会と英語・英語教育」では、日本という社会で、外国語として教室で英語を学習するとはどういう状態であるのかを詳しく説いている。第1章では、「日本人が英語の勉強に費やしている時間は決して多くないことを理解する」「学校英語教育にとっての適切な目標とは何かもう一度考えてみる」「日本の英語教育の歴史に由来する特殊性を知っておく」の3項目が、評者が特にじっくりと読むことを薦めたい項目である。

「第2章 英語教育の争点：文法の指導・子どもに対する英語教育」では、日本の英語教育の中心的位置を占めてきた「文法指導」について、著者の意見が説得的に

書かれている。続いて、言語習得の臨界期仮説について、そして、児童英語教育や小学校英語教育、イメージング・プログラムなど、学童年齢における外国語教育に関し、教師が知っておくべきことが丹念に述べられている。

「第3章 英語教育のための基礎知識：言語観・言語習得観の変遷と第二言語教育へのアプローチ」では、なぜ今日の教授法が提案されるに至ったのか、オーラル・アプローチ全盛時代の1950年代から現在に至るまでの約60年間の、英語教育に対する社会的要求や言語習得観の変遷に触れながら説明している。

「第4章 タスクを中心とした第二言語教育」「第5章 4技能の効果的な養成」の2章は、教育実践に関心をお持ちの読者にはじっくりと読んでいただきたい章である。4章で取り上げている「task（タスク）」とは、そのままカタカナで表記されるのが一般的となっているが、大雑把に言えば、「授業中に行う様々な言語活動のこと」である。英語を使用して他者とコミュニケーションできる能力を身につけることを目標とする現代の英語教育では、真のコミュニケーション能力に結びつくタスクが大変重要になってきている。では、どのようなタスクを実践すれば良いのか、4章に解説されている。5章では4技能の具体的な指導方法の提案と共に、4技能を学習するとはそもそもどういうことなのか、著者の意見が説得的に語られている。ただ単に、「英語の教え方」が書いてあるのではなく、その裏にあるメカニズムも説明されており、深い知識を得ることが出来る。続く「第6章 英語のテストと評価」はテストとは何か、そしてテストに対してどのような心構えをすべきかについて著者の意見が述べられている。

最終章の「第7章 これから先生になる人へ」は文字通り、近い将来、教職に就こうとしている若い世代の大学生、大学院生たちへの著者からのメッセージである。英語を教えるだけでなく、「先生」とはどのような存在であるべきか、熱く語られている。

ある書物を読むということは、その著者と（一方通行ではあるものの）会話することである。今回、松村氏と書物を通してじっくりと会話ができたことは、評者にとってとても大きな財産となった。

（しらはた ともしこ・静岡大学教授）